□研究、調査
○尾鷲林業を見て
○懷現灘のさんせうを偲ぶ
○上高地旅行中の二日間
□隨筆
○天城山礦毒の記
○目覺めよ諸君
○行くべき所を誤らずんば可なり
○陽のめぐみ
○山のロマンス
□文苑
○短歌
○長詩
□通信、彙報
○忘れ事
○寄宿舍から
○謹告
○動靜

大正十年九月廿五日　第百四十三號　毎月廿五日定期發行　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

尾鷲林業を見て

福川生

五月雨降る六月下旬の事なりき。西垣林學博士引率の三年生視察旅行團に參加し二十四日夜上野を出發淺間木曾と漸次視察を重ねて尾鷲に着きたるは二十八日午後四時半なりき翌二十九日縣技手郡技手の案内にまり早朝より視察に向へり當日は幸にも連日の雨名殘りなく晴れ燦然たる光は吾等一行を

抑々尾鷲は山岳重疊して更に農耕の利を起すに由なく從つて古來林業思想自ら發達し現今の如き狀態を呈せるに至れり尾鷲林業は吉野林業に相似たるものにして造林撫育の方法等類似の點多く只吉野に於ては樽丸等を目的とする伐期八九十年乃至百年の杉林なるに當地方に於ては植材を目的とせる伐期四五十年扁柏林なるを異にするのみ

第二地勢及氣候

尾鷲は三重縣の西南に位し三面山を以て包まれ僅かに東海に接するのみ紀伊山脈の支脈重積して深く熊野灘に突出し海岸に至る迄山岳聳立すれば見るべき河川原野なし耕地の如きは此處彼處に點々散在するに過ぎず蓋し林業の發達せざる所以なり地層は大體に於て秩父古成層より割合淺く往々地下二三尺にして基岩に達する地あり海洋に面せるを以て常に微風あり岩石の風化適當に行はれ粗密輕重相混じ加之植物性の腐朽物を混じ粘土性を帶ぶるが爲排水頗る便にして植物營養土有効なる成分に乏しからず林木の發育に遺憾なき處なりとす氣候は溫和にして冬期と雖降雪稀にして僅か一二回に過ぎず降水量の如きは甚だ多く我國屈指の雨地なり本月の如きは殆んど一ケ月雨天なりきと加之海に接するを以て常に海風あり氣溫自ら和らげられ斯くの如く氣候地味全く林木の發育に適せざるなく其成績の良好なる亦宜なる哉

第三林地の狀況及交通

前述の如く郡内到る處山又山を以て充たされ耕地の如きは點々散在せるのみにして全郡殆んど森林地と稱するも不可なき有樣なり僅かに十七方里の小郡にして三万町歩餘の森林面積を有せり。

森林面積を細別すれば次の如し

公有林　三五〇町歩
私有林　九九二町歩
社寺林　三〇〇町歩

而して郡内各町村何れも公有林を有せざる

謹告

拜啓來る十月十六日本校廿週年記念式擧行兼ねて秋季大運動會開催致候間萬障御繰合御來會被下度此段誌上を以て謹告仕候也

雨天順延の事

大正十年九月十五日

木曾山林學校
校友會

會員各位

總說

吾人は今迄に尾鷲林業とは多く聞きたる事なかりき然るに今度幸に彼地を訪れしを嘉

一人の見し事聞き事を簡單に記述し讀者諸兄の參考に資せんとす

第一

照せり今貴重なる誌面を借りて吾人の見し事聞き事を簡單に記述し讀者諸兄の參考に資せんとす

第一　總說

はなく小は三十町歩大は五千町歩に及び公有林は何れも明治四十年四十一年に設けられしものなり。

私有林は郡内十數名の林業家の所有せるものにして古くより人工植栽を以て更新せりと雖未だ完全なる施業方針は見る能はず蓋し本郡の地勢は絶對的林地にして近年殖林熱の勃興に從ひ却て現在僅かに存する田畑に迄扃柏杉の殖栽をなすものあるを見るに至れり。

尾鷲は鐵道の便なき爲交通不便なりと雖山岳深く海に突出せるを以て良港多く船舶の出入自ら盛にして林産物の運搬は專ら海運に依り自由に市場に輸出せらる、有樣なり加之鐵道の便も近く開かる、山なれば海陸共に交通盛となり林産物の販路益々擴張せらる、に至るべし

第四　造林及保護

(一)造林樹種

尾鷲林業に於ける造林樹種は扃柏杉の二種とす然れ共尾鷲林業は古來扃柏の殖林を以て發達し來たりたるものなり之れ地質氣候共に其生育に適し品質優良なる材を產出し市場に其聲價高く且一に其地の慣習より來りたるが故なり然りと雖、全山皆扃柏を以て覆はんとするは地勢風土の許さざる所にして、其濕潤なる陽地は杉の殖栽を有利とするを以て近年之れが殖栽をなすに至れり其他松竹等なきに非らざるも極めて小部分にして尾鷲林業の目的に非らざるが故に以下專ら扃柏に就きて其概要を述べん

二、殖栽及撫育

其他附近に存する孤立或は疎立の健全なる四五十年母樹より種子を採取し丁寧に水選したる後適當なる所に一ヶ年保存す

播種の季節は通例四月上旬にして、播種前油粕を坪三合平均に施し以て基肥となす而して適當に整せられし床面に坪三合の割合を以て下種す、下種を了りたる時は細土を二分位の厚さに篩ひ掛け尙之れを掩ふに扃柏の葉を以てす、播種後凡二十日にして發芽し苗の六七分となりし頃扃柏葉を叮寧に除き去り直ちに之を以て日覆ひをなす而して適當に「間引き」「除草」を行ひ「除草」は年五回とす霜除けの如きは之れをなさず施肥も其翌年に於て一畝に三貫匁の人糞を只一回施すに過ぎず

尙苗木は旱害の外虫害殊に根切虫の爲に枯死するもの多し床替は年々一回宛三年間行ふものとす然るときは一尺五寸の長さに達するを以て山出苗とす之れに滿たざるものは尙一回「床替」をなし翌春に至りて山出しするものなり、山出苗は一本僅かに一錢四五厘(大正十年に於て)にて養成せらると。而して一升の種子より一年生二万本二年生一万本三年生六千本山出し苗五千本を生ずるを普通とす。

林地は極めて叮嚀に地拵へし二月中一反歩一千本の殖栽を普通とするも近年木材界の趨勢は漸次多少の疎植を取らしむるが如き傾向あるを以て近年六百本を最適とし三尺二三尺五寸の長方形殖樹をなせり植付け後一年にして一割乃至二割の枯損を生ずるを以て稍大なる苗にて補植をなす。

尾鷲地方は氣候温暖なるが爲雜草の繁茂甚しく「手入れ」に困難を感ぜり植付けの年より五年間毎年六月九月の候に「下刈り」をなす而して五年乃至十年間は年一回七八月に於て下草を芟除す然るときは林相次第に鬱閉し雜草の繁茂せざるに至る

枝打ちの如きは之れを完全に行ふことなく下刈りと同時に少しく拂ひ落すのみにして自然落下を待つものとす、然れども扃柏は其枯枝損自ら脫落すること稀なれば鬱閉せる林相にありては地上四五尺より枯枝の密着せるを見るの有樣なり、斯くの如く枯枝多きときは折角の柱材も所謂死節を生じ其價値を減退するものなれば漸次「枝打ち」の必要を感じ來れり。

時を經ると共に林木互に發育し遂に優劣を生するに至れば不良木の除伐を行ふ除伐は九年目或は十年目より十二年目の間に於て約一割程宛二回行ふものとす而して植付け後十五年目に於て成長力を減ぜし所謂被壓木及生長極めて良好にして他林木を壓倒するの憂あるものを冬季伐採し林相を整一にして安全なる狀態を保たしむ之れ第一回間伐にして冬季事業閑散なるを利用して行ふ此間伐は約二割程度を以て伐採し、一人一

日約百本の行程とす其間伐木の大さは一丈の長さに於て末口一寸を見る、次に二十八年目に第二回間伐約一割を行ひ其後三年目毎に約一割宛の間伐を行ふものとす第三回目即ち二十一年目には長さ一丈に於て末口一寸三分を示し第四回目即ち二十四年目には長さ二間にして其末口一寸五分の生長を示せり而して植付後三十年目頃より春秋二季の間に於てアイギリと稱し生長惡しき林木のみの伐採約一割五分を行ふ尙三十五年目に於て再びアイギリを行ひ以後間伐は止め專ら殘存木の生長を促す其殘子木の大さは目通周平均一尺四寸高さ四十尺に達し而して受光成長をなさしめし殘存木は四十年生に於て皆伐を行ひ更新するものとす其主伐材の大さは目通周平均一尺六寸高さ五十尺に及べり

此處に於て主伐收穫を計算して見んか一反歩に三百三十本の林を殘し材積約百尺〆余を產し一尺〆十三圓となすも千三百圓を收ひるの有樣なり誰れが驚歎せざるものあらんや

次に當地方に於ける伐木賃金支拂方法を附記せん

間伐主伐何れも總て出來高拂にして必らず剝皮の數量を以て支拂ふものとす即ち伐採と同時に人夫は樹皮を剝き長さ五尺七寸(二間と云へば)幅四間(二十二尺八寸)を束ねたるを以て一束とし一束につき間伐は五拾錢(但伐區附近の林道迄搬出するものとす主伐は四拾錢を支拂ふ一人一日約四束を伐採す

(二)森林の被害

尾鷲地方にありて森林の被るべき害は至つて少なく只兎鼠の害を受くることあるのみ殊に植付け後三四年間は其被害著し、之れ等に對しては其の驅除豫防に專ら意を用ひ鼠の害の如きはチブス菌の散布に依り其の効を表せりと

其他潮風の害と雖之れを蒙ること殆んど稀にして偶々五月頃暴風雨の襲來することあるのみなり殊に恐るべき雪の害は更になく概して林業は安全に營まるを以て森林保護の念に乏し

第五　運搬

尾鷲は前述の如く河川の便なきため林產物の搬出困難にして加ふるに急峻なる林地多きが爲運搬甚だ不便なりされば其搬出方法の如きも極めて幼稚にして特殊なる裝置を見る能はず只適當に玉切りたるものを人肩或は僅かに木馬車を使用するに過ぎず

近來林業思想の普及せらるゝと共に運搬費の節減は林利の增進に關係あること尠からざるを知り專ら意を此處に用ひ遂に會社を聯織し索道を以て林產物の搬出に從事するに至れり

第六　林產物賣却方法

尾鷲地方は森林所有主にして木材商業を兼ねるもの多く山元に於て立木の儘競賣に附するを唯一の方法とせり而して競賣落札者は代價の二割を直ちに支拂ひ六ヶ月後に搬出を完了するを約す、伐採着手後三ヶ月目に代價四割を支拂ひ搬出濟と同時に殘り四割を支出し以て契約を履行するものとす然れども近來林產物の需要激增し價格暴騰の結果所有主は進んで自ら伐採製材し東京に送り木材問屋に其販賣方を委託するに至れり

第七　林產物及其販路

尾鷲林業に於ける林產物及其製品の種類次の如し

角柱材、磨丸太、板材、木材、木炭

樹皮、椎茸

就中角柱材は其產額最も多く六割以上を占むるの有樣なり、而して角材は二寸五分角以上五六寸角とす

次に東京市場に於ける價格の一例を示さん

ひのき四寸角七尺十五圓(但一尺〆の價)		
仝　仝　一丈		二十五圓(仝　　)
仝　仝　二間		二十六圓(仝　　)
仝　仝　二、五間		二十八圓(仝　　)
仝　仝　三間		三十三圓(仝　　)

之れ等林產物は專ら東京名古屋市場に輸出せられ遂年其額を增加せり而して山林業者木材業者、林產物問屋業者を以て組織せる尾鷲林產物同業組合あり事業上の弊害を矯正し其利益の增進を圖り斯業の發達改良を期しおれり、大正九年度林產物の產額は二百万圓の多額に上れりと

第八　人工林の必要

以上の如く尾鷲林業が人工林を以て今日に至れるは地區狹少にして人口過密而も他に生計を營み得るの途なく山間の僻地なると氣候風土林木の生育に適せるが爲なり誰れか彼地に旅行して其生長の良好なるに驚歎せざるものあらんや況んや吾人の如き常に木曾の天然林を愛せしものに於ておや天下の三大美林と誇る木曾の扁柏林に僅か四十年を以て更新せらるゝが如き林相あるや吾人未だ之れを聞かず小川の如き林地と雖二百年を要するの有樣ならずや徒らに天然の力にのみ愛着し其惠に依らんとするは愚の甚しと言はん

今後木材の需要は益々增加せらるゝに反し其供給に至難なるは必然のことなるべし加之人口の增加は山林面積を減少せしむるものにして工業の發達は其消費高を增加するものなり現今の如く天然の力をのみ待つに於ては遠からず木材の不足は叫ばるゝに至るべし此處に於てか人工林の造成を必要とする所以なり近年獨國にては林地に施肥し林木の生長を促し以て需要を充さんとするの有樣となれり

邦國の如きは氣候風土林木の發育に適せざるの地なく加ふるに人工を以て其發育を助けんか必ずや蒼々たる森林は到る所に見るなるべし宜しく林業家たるもの奮起其責を負はざるべからず(終)

權現瀧のさんせうを豫報

菊池生

山林學校の附近にも珍しい動物が少なくないそれは追々發表する事にして今日は權現瀧のさんせうをに就て少し書いて見やう

一体さんせうと名の附く物には數種あるが權現瀧のものは、箱根さんせうと呼ばる、種類で、これには諸趾皆黑色の小爪がある。而して本邦山間水の清い日光の餘りあたらない溪流に產するものである。其他に大さんせうを、ふぢさんせうを、かすみさんせうを云ふ種類もある

是等の虫に就ては田子氏のさんせうをの話及び「日本產さんせうを」の研究等がある箱根天城日光等では春期これを捕へ串に刺し火に炙りて藥用にし、日光ではこれを「ひびはり」といふさうな木曾でも捕つてたべる事は諸君も知つて居られやう。扨て自分は權現瀧を中心にして調べて居るが先頃伊那に遊び神稻小學校にて江口氏の採集した物を見たら木曾のものと比べて大きさが違ふ木曾のよりは頗る大きい、氣候溫度食物の如何は虫の成長に密接の關係があるだらう江口氏は引續きさんせうをの發生を研究される由なれば木曾のものと比較せば面白い結果を得る事と思ふ

飯島博士の著書中にあるシユレーゲル氏によればさんせうをの老成せるものは五寸二分位あり總を有せる幼稚のものは一寸六分內外ありこれ等の大ささは江口氏のものと似て居る。

四月廿三日に東山演習林の落葉の中より得たるさんせうをの親は三寸九分。四月廿五日瀧下より得たる卵囊は長さ三寸四分巾五分內外、囊中の幼虫は六分程の者十匹盛に活動して居た、この卵囊の長さも伊那產のものよりは五分も短かい

數回の採集の結果より考へると五月產卵し六月末幼虫卵囊より出で七月には八九分となり八月に入りて一寸にあまり九月には一寸四五分に達し十月末冬眠期に入るらしい而して翌春四月中旬一寸六七分となり漸次成長して夏期には二寸五六分を越へるものらしい。

權現瀧の水は今でもかなり冷たい。この前に溫度と成長との關係を述べた事があつたが水が冷たくては成長が餘程遲れる事と思ふ調べるのに都合のよい事には寄宿舍の炊事場へ水道管を傳うてさんせうをの幼虫が時々現はれる事である。裏山演習林の方の溪流にも該虫の居る事はそれに依つてもわかるが、水の溫度土質等も多少異なる從つて成長も同じやうに行かぬらしい(未了)

上高地旅行の二日間

西澤生

七月廿八日　晴

余夙に上高地の森林美を視察せんとを企て其の機を失ふ屢々なりしが偶々本校第二學年生の同地旅行に關し附添として塚越先生と余とが被命を得たので、七月廿七日朝

五時〇分木曾福島驛發の汽車に乘りて藪原驛に下車し奈川村を經て當夜白骨溫泉塲に投宿せり。

翌朝曉を冒して起き土り旅裝を整へ、强力者の案內にて一行は相前後して土高地溫泉に向ふべく勇氣勃々旅館を出發しぬ。此日や天氣晴朗暑氣益々募る、白骨の小嶺を越へて愈々坂道に差しかゝれば、峭壁萬重路極めて嶮に、若し一脚を誤る時は忽ち顚轉倒覆し、千尋の底に墜落すべく、斯る嶮道なれば將に呼吸切迫し手足勞憊して進む能はず、因て屢々老樹の下に休憩を試み、襟袖を開きて蓊鬱たる樹間風を含んで夏熱を拂ひ爽快を覺へ、進むこと約四里に至れば上高地平原の入口に達す、左には實に雄大狂盛なる燒岳の噴煙を望み、右には燒岳の溶岩を以て梓川水流を堰止みて築き上げたる大正池の清洌あり池中には栂樅の枯木林立して其の間を多數の岩魚浮遊せり其の絕佳は筆紙の及ばざる處なり午后三時一行勇氣を鼓舞して燒岳の頂上に登れば卒業生和田宗吉君は吾々一行の爲に態々登山され居れり下山六時清水屋支店旅舍に投宿せり

燒岳は信濃飛彈の國境にありて梓川の水源地をなせり、而して該山の森林植物帶を便宜上三帶に分つることを得、卽ち土高地平原までを山毛欅帶として次位にあるものを白樺帶又其次に位するものを偃松帶とす

一、山毛欅帶

本帶は所謂上高地平原までの間にして之に生ずる樹種は山毛欅を主とし、他の混生するものは卽ち モミ、ツガ、カヤ、ヒメコマツ、シズナラ、コナシ、ウハシヅザクラ、ウリハダカヘデ、ホ、ノキ、ハリギリ、サルマンサク、クロモヂ、ツリバナマユミモミヂヤマツ、ヂ、リヤウブ、ヤマアヂサイ、タラノキ、シラクチヅル、ツルムメドキ、ミツバアケビ、コブシガマズミ、ヤマウルシ等なり

二、白樺帶

本帶は約六千尺位までの間にして、之れに生ずる樹種はミヤマハンノキ、イハヤナギ、ミヤマナ、カマド、ミネカヘデ等なり

三、偃松帶

本帶は六千尺位より絕頂に至る間にして、恐らく燒火以前は偃松の密生せしならんも爆發と共に飛散せられ若くは埋沒せられしものならんと今尙噴出せられたる岩石又は溶岩の間に僅かに偃松の生ぜるを認む本帶中に生ずる樹種はミヤマハンノキ、イハヤナギ、ミヤマナ、カマド、ミネカヘデ等なり

仝月二十九日　晴后雨

午前六時旅舍出發。朝霧に包まれ輕からざる足を引ずりながら和田宗吉君の懇切なる說明の下に、上高地平原中の小梨の木、落葉松、山毛欅の天然林並に彼の有名なる明神池、嘉門治の小屋附近の勝地を探りたり。而して風景絕佳の上高地を後にし、十時歸途につき德本峠の嶺に至り、記念撮影後約二時間の休憩を試み、夫れより峠道を飛び下り十二時半松本小林區署官行伐木事業所に著し、中食を喫し同所視察の上二時半出發、軌道に添ふて下ること約二里半にして島々部落に達し五時三十分披れし足を清水屋大黑屋に洗ふ同夜卒業生加藤純一和田宗吉、岡西猛三君の茶菓の饗應に預り、尙席塲に於て加藤君の從業に係る久原家伐木運材等の說明あり頗る有益なりき。(完)

天城山踏破の記

立道生

去る七月二十三日縣基本林下刈調査の命を拜し伊豆半島の南端上河津外二個村への出張命令が出た之迄は何時も沼津から海路を行つたがこんどは自分の足驗しに親讓りの脚で踏破しやうと企てた

五時十五分靜岡發の列車で三島驛より駿豆線にゆられつゝ、大仁へ着いたのは丁度午前九時此處より上河津迄十里餘の下田街道をてくるのである上狩野村湯ヶ島に至る五里の間は下狩野中狩野等の部落があつて少しも寂しさを感じないが上狩野より賀茂郡上河津に至る上り下り五里の天城山道は部落とてはなく茶屋二軒と天城御料伐木所の人夫小屋が有る己である湯ヶ島へ着いた時は午后一時であつた雨は止んだが眼前に高く天を磨す天城山は一面の霧である此處には素的な溫泉宿があるこゝで中食をした宿の女將と下女と口を揃へて僕を冷かす「こんな雨天に登りなさいますかい……この間も人殺しがありましたべい……」と盛んに伊

豆訛りのベイ言葉で冷かす僕がビールをガブガブやつてる間に女將は次の樣な話をした――丁度四年前のことである上河津より湯ケ島を往復する天城通ひの配達夫があつた或日のこと河津局より一萬五千圓の手形を携へて天城峠へさしかゝつた途中より道連れになつた二十四五歳の男が杖にして居る棒で配達夫の頭を續けざまに三ツ四ツ撲つた彼は堪へられず人事不省になつてしまつた彼の男は早速鞄より手形を出して兼ねて同意の人力車で澄まして下田銀行にて現金と交換すべく上河津へ下山したしばらくして配達夫が我に歸り直ちに間道より上河津へ下り警察署へ届出た警察署では直ちに非常線を張つたそれとも知らず犯人は堂々と二人挽きで下山して來たのでマンマと其の網にかゝつたと言ふ事である今年になつてからもこの山中で二人殺された極最近の事で去る七月三日上河津より年頃三十歳と言ふ一見餘り賤しからぬ婦人がこの街道を通つた丁度頂上で道連れになつた十六歳位の子供かあつた婦人は子供のことでもあり別に疑ふ處なく談じつゝ歩行した峠より少し下りの處で子供はいきなり自分の手拭で彼の婦人の首をしめた婦人は不意を打たれて嗚呼の聲を最後に絶命した子供は直ちに懐中をみたが唯の一圓五十錢しか無かつたかれもその時は落膽したことであらうがそれよりも殺された婦人の命が一圓五十錢の代○になつたとは物價騰貴の○○こんなに安いものは又と有るまい誰でも同情せずには居られまいこうした犯罪は毎年の樣にあると言ふ

中食がすんで湯ケ島を出たのは午後二時之より上り下り五里の天城山をこへねばならんかと思ふと何だか氣味惡いあたりは二十年生位の一面の松林で處々に天城御獵場と言ふ標柱が立て、ある廣い街道ではあるが一人だに通行する人がない時々下田通ひの自動車が通るばかり自分は懐中に八日分の旅費七十圓何錢しかないが今此處で殺されるとしても前の婦人よりも命が五百%程高い譯である三時間程かゝつて頂上へ着いた四町餘もある長い隧道がある中は眞暗で此處を通る時の氣味の惡い事一通りでない實に頭がシーンとしてしもうこゝを越へると上河津地内で水田が下田の方へ向つて流れて居るこのあたりの御料林の杉は豫想以上に大したもので成長も隨分よい今迄は世傳御料林であつたが去る八月二日普通御料林に變更になつたこの山には非常に有望な金鑛脈があるさうで誠堀願が百數拾件も出て居ると言ふから寶庫が開拓せらるゝも遠くはないであらう上河津村湯ケ野溫泉宿へついたのは夜の七時半であつた　以上

さめよ！　諸君

三原生

北米の或る山の下に見える靑い牧場には毎日多くの豚が自由に放たれて居つたそして其れ等幾多の豚の群は日が山の端に限る迄静かな自由の中に保たれて居つたけれども日が全く落ちて黄昏時になると決つて豚の幾群かは今迄とは全く變つた窮屈な牧舎の中に追ひ込まれて行つた

始め牧夫は豆を播く事に依つて其れ等の無智な豚の群を集めたそして葉つた豚の群は自分の前へ再ぶ豆を播かれる時それがやがて自分等を彼の恐ろしく窮屈の牧舎に追ひ込むものであることも氣付かずに我れ先にと飛び出したオ、何と無智な――うして哀れな生命であることよ！。

ア、けれども其れは人事では無い吾々には今悲しい事が目に寫る哀れな豚！と言つた吾々が――誇るべき生命を持つと信じて居つた人間が矢つ張り――ア、それは何と言ふ切ない事だ。けれども其れは夢では無い幻では無い確に事實だア、堪らなく苦しい事だオ、汝哀れな人間よ！　御前は矢つ張り彼の哀れな豚じやないか豆に――金につられて恐ろしく窮屈な生命を繰返して居る御前自身は豚じやないか

オ、吾々は如何にしてほんとうの生命に活きて行かねばならないのか金と言ふ豆につられて働くのかそれとも金と言ふ豆を貯へる爲に働くのか？俺達の生活はりんな低級なものなのかイヤどうしてもそんなくだらないものではありたくない如何にして最も高尚に生たい充實した生命に――自分の生活を最も有意義に眞の人生の意義にかなはしめたいけれどもけれども其れは結局駄

目だらうか？イヤ出來る！それは出來るきつと出來る俺には確信が在る俺は決して金につられて働きはしないぞ「キリストの愛吾れを勵ませり」オ、此れだこれだ俺は何と言ふ幸福者だ俺には何時も明るい希望が見へて居る、俺は嬉しくて堪らない俺は働きたくて堪らないのだだから俺は働くのだオ、何と尊い勞働だ何と意義ある生活だ何と充實した生命だ

ア、けれども俺は昔は豚だつた豚だつた豚も豚たねの惡い豚だつた

豚の心は悲しかつたそして誰も居ない林の中で切なくなつては泣いたものだまた豚の心は暗かつたそして哀れな豚には紅い燈火をくぐつて綠の酒に醉ひ伏したレストラントの一夜も在つたのだ豚の心は闇だつたもう人影のない死んだ樣な夜の町を彼の足は宛途もなく闇から闇へと辿つたのだそして彼の目には蒼白い冷い涙が光つて居たのだ汝の虐げられたる過去の歴史！記憶！ア、りんな事は今考へてもゾッとするア、それにつけても悲しむべきは汝の多くの滅び逝く同胴よ！またそれらの滅び行く魂よ！醒めよ！醒めよ！今醒めて依り頼れ無窮の神に愛なる神に　そして生きよ！無窮に愛に！諸々の迷へる魂よ！汝の悲哀より逃れよ！汝の苦痛より逃れよ！汝の憎惡より逃れよ！然して其處に榮光輝く國を見よ！慰めと喜びと希望に充てる國を見よ！其處には必ず無窮の感激と生命はあらん

行くべき所を誤らずんば可なり

錦楚生

一〇、七、三〇

生と死は問頭にあらず、唯一日の生を力强く行へば可なりである、吾人の生るゝや何物をも有せず裸一貫なり／然れども自然に享けたる性あり、これを行ふや、縱にも横にも何等拘束されるものはない、人間一生の働きには能働圈といつたやうな限界を設ける譯には行かない、故に無限大である、一生の働きが無限大であるなれば、之を有限數で割つた一日の働も無限大であらねばならぬ、この無限大の力を何れの方向に用ゆべきやといふに、是亦東西南北意の向ふまゝである、吾人の天地は形而上にも形而下にも全く解放せられて居る、食ひ且歩むといふやうな吾人の機能を充分に發揮せしむるに足る、力を培養するに必要なる本能は先天的に享けて居るが如何なるものを撰んで食ふべきかも後天的に定むべきものである、西洋と東洋の食物の異るにても明である、美醜の標準も後天的に定まるものである、東洋畫と西洋畫と全く趣が異るのでも明らかつたことである、行の善惡といふことも元來明かなる標準はないのである。西洋の敎の善と東洋の敎の善とは必ずしも一致して居らぬ、暫く後天的に吾人の作製せる定規に從つたまでの事である、故に東洋文明と西洋文明との二大潮流が衝突して混流と起すと、歸趣を失はずには居られない、聖人君子の敎と雖も批判を免れない。聖人君子の道だからといふて盲從することは出來ない、よし盲從したからが何の役にも立たない、眞に心から服した道理でなければ、新に聖人君子以上の人、少くも吾人が聖人君子以上なりと信ずる人が現れて新なる道を宣傳するならば、又これに盲從せねばならぬ、況んや世の中に變動が起つて生活の不安といふやうなものに覆はれる時になると、一たまりもなく根底が動かされ、惑亂者のために虛に乘せられて、思想界の暗黑時代、少くも混亂時代を現出するのである、人に由つて作られたるものは又人によつて覆へさるゝ可能性を有するからである、況んや注入的で僅かにこれを唱道したところの人の人格と、其國の慣習とにのみ頼つて信を擊いで居つたものに於てをや、である故に吾人は獨斷的に人の道なるものを肯定して之を人に强ゆることの甚だ不合理にして、又甚だ効果の少きことを感せずには居られない

又斯の如き獨斷的のものを出發点とせなくとも、人間の大道は明かなるものがあるではないか、卽ち自己の愛なるものは先天的の本能である、自己を愛するといふ事は自己をして自己本來の機能を充分に發揮すべき措置をとるといふ事で、苟も人間が一歩

でも世の中へ踏み出して事を成さんとする根本思想である、白痴ならざる以上は、この思想の缺如するものはない、これが吾人の最も美しい最も尊敬すべき最も純正なる性情である、これを擴充したものが、直に子としての父母の愛、親としての子の愛となるのである、誰かこの僞らざる飾らざる至純至誠なる愛を否定するものがあらう。これは古人の垂れた教に依つたものでもなく、社會の定めた掟に強ゐられたものでもない、自己の愛の直ちに延長された所のもので、人間本來の性情の深酷に發露したものである、これが人間の大道の出發点であらねばならぬ、これを措いて何物か又人間至道の根本となすべきものがあらう、誰かこれを人間の作爲した理智といふものがあらう、一層これを擴充延長したものが兄弟姉妹、一家、近隣、一村、一學校と順次愛の範圍が擴張せられる、然し自己愛を中心とした波動であるから遠くなるに從つていよ〳〵稀薄になるのが原則である、嚴正にいへばこれは差別愛であらねばならぬ

陽のめぐみ

尾花

暗い十燭の電燈の下で靜かに書を繙く時、トギレ〳〵に鳴くあの蟋蟀の忍び音がさすらひの旅を續ける自分には一入淋しく哀れに感じられる

教室から歸つて白墨にまみれた手を手火鉢の水で洗ふ時ヒヤリとする、そして思はず「オ、寒」と身ぶるひする日が多くなつた

然し秋とは名ばかりまだ放郷では殘暑に苦しんで居るのに木曾では夏服を身にまとひ乍ら兩手を火鉢にかざして居るのかと思ふとほんとにおかしくなる

木曾の腰辨が誰れしも一度は實行するあの「洋服に下駄」と「夏服に火鉢と」「ナカノリサン」とは或は木曾の三名物かも知れぬ

□

雨のために地に叩きつけられた農園の大根が腐るかと思はれる程今日も來る日も降り續くので庭園の花は皆首をうだれて居るうして自分の脊丈よりも高く伸びて居る

「ヒマハリ」は雨にぬれ雲に隔たれ乍らも尙「アホロー」を慕ひつゝ、東より西に花頭をめぐらして居る、ろのいぢらしい樣を見る度に「アホロー」の無情を憎むと共に「ヒマハリ」の爲めに同情の涙を禁じ得ない

□

八月九日に縣知事が來られた時にはうれ程でもなかつた苗圃の草が夏休みが終つて歸つた時にはもう苗木の姿が見ゑぬ程伸びてゐた　まるで牧場か荒蕪地のやうに……

そして何れの草も皆花ざかりで夜は涼しい秋虫の聲さへ聞こえる

初めての實習の時間に苗圃に出た生徒は誰れも彼れも一樣に驚きの眼をみはつて少時呆然自失の有樣だつた

然しそれ程雜草の生へて居た苗圃も生徒の熱心なる除草と臨時實習の御蔭で意外に功程が捗つたけれこの十日間は雨天のために殆んど實習が出來ないのでまだ少し殘つて居る

播種苗圃は蜂須賀の種子が惡かつたために發芽は充分とは云ひ得ないが原より買入れた種子は發芽も殆んど申分がない

床替苗圃は二たび施肥したために苗木の生長も非常によく枯損歩合ひ割合に少い

試驗苗圃の成績や其他詳しい事は秋季實習終了後に解表する事にする

□

創立二十週年記念祝賀會及運動會ももう目前に迫つて來た十月十六日といへば丁度今日から一ケ月しかない　それ迄に諸種の準備を急いで居られる先生方には何ども感謝の言葉がない　特に林友記念號の編輯を受持つて居られる先生と記念エハガキや記念號に載する寫眞を受持つて居られる先生の御骨折りはさぞかしと御察して居ます

記念醵金帳によると卒業生六一七名の內死亡者三一名醵金申込者三九一名　殘一九五名は尙申込みがない　當方でも醵金帳其他の整理上非常に都合が惡いから未だ申込まれない方は出來るだけ早く申込んで戴きたい

そして林友代不納者及不足を告げてる人も（十二回卒業以前は全部不足）隨分多い樣ですから其の人も此の際拂ひ込んで戴きたい

山のロマンス

ケイ生

是は私が今夏の休暇中A縣に旅行した時或峠の茶屋でうこの婆さんから聞いた話

其の日は嫌に蒸暑い日だつた。茶屋の所から眞直ぐに急勾配な坂道を、燒きつける樣な眞夏の太陽がゆら〳〵と照返へして居た。風一つない大空には綿をちぎつた樣な白雲がふんはりと浮いて居た。茶屋は峠の半頃に、一寸山の北蔭になつて、こんもりした林の中には涼しい清水も溜つて居た。私は茶屋の樣先に腰を下して、湯の樣な汗を拭ひ乍らやつと魅つた樣な氣がしたのだつた。深い谷の底からは喧しい蟬の聲がして、冷々した木蔭の空氣が、肌障りよく溫い躰に觸れて行つた。丁度茶屋の横手の大きな合歡の木の下に、古びた石碑が建つて母子塚と書いた文字が半苔に埋もれて居る婆さんは其に就てこんな話をしたのだ。

何でも明治初年頃だつたらしい。こゝの峠からは未だ七八里も山奥だつたそうな。其年も暮れかゝる師走の或一日、只眞白な雪に閉込められた山奥は、山から谷へ、谷から森へと、一樣な灰色の暮色に包まれて行つた。れまけに夕方から吹募つた風が物凄い吹雪になつて猫一疋も通らぬ山奥は、否が上に淋しく暮れて行く頃、一人の旅人が道に迷ふて此山中を彷徨ふて居た、日は暮れる、道は分らず。人の住家さへ無いこの山奥に、手も足も凍り果てた旅人は、幾度か重い躰が雪の上に倒れうになつた。林の梢を吹捲くつて來る吹雪は彼の躰も一緒に吹拂つて行かうとする、思はず旅人はそこに蹲んで了つた。と、この時、遙かの森から吹雪を通して漏れてくる一縷の光――

「お、」旅人は叫んだ、と復た確かに灯影。

「灯だ――灯だ――」彼は天庭に立上つた彼はやつとの事で其處迄辿り付いた、うれは炭燒く山賤の住家らしい、雪に埋もれた茅屋の中から漏れて來る灯影に、降りしきる粉雪がチラ〳〵映つて居る

「御免なさい……御免なさい」旅人はコト〳〵と戸口を叩いた

……

「何誰でござんすか――」微かな返事がした

「この吹雪に道を迷ふた旅人でございます今夜一晩だけ何卒お宿のお慈けを願ひ度ふございます」

「ろれはわかいお難儀でござんしよ、サアお這入りなさりませ」旅人はホッと胸撫下した、重さうな外套を脱いで這入つて來た旅人はまだ年若い男だつた。內らには若い娘が一人爐側に踞り乍ら凝乎と不意の來客を眺めて居る、扉の蔭に破布團を着て寢て居た老婆らしい人影も半分躰を起しかけた

「御厄介に濟みませんが――終途中で日に暮れられて難儀を致しました」

「この暴れでは迎も他國のお方は越されあせん――わかい穢くてお氣の毒だけど」

老婆は寢床から出て來て爐へ栗を燻べ込んだ旅人はもう草鞋の紐も解けぬ程凍へて居た、娘は旅人の雪を拂つてやつた、パチ〳〵と燃ゑ上る土間敷の居爐裡に足を伸ばして彼は漸く魅つた樣な氣がした、彼は遠い都邊りの商人で、今度商用で遙々この北國へ廻つたのだつた、外は未だビユウ〳〵と吹き暴れて居る、爐の火がパッと燃ゑ立つと破れた壁も暗い茅屋の中に、沈んだ旅人の顏と、娘の黑い眸が幻の樣に浮んだ、

「今夜は爺さんは歸つて來めえこの暴れでは――」老婆は復布團にもぐり込み乍ら獨言した、娘は不安さうな小眉を寄せて、戸の隙間から眞暗な戸外を覗いた、細かい吹雪が內の中へ舞ひ込んで來る、娘は今日も里へ炭賣りに出掛けた老父の歸りを氣遣ふのだつた、老婆は床の中から自分が昔見物して來た上方邊りの事を夢の樣に思ひ出しては、色々と旅人に話掛けた、男は体の溫まるにつれていつか先刻の難儀も忘れた樣に、美しい都會の有樣や旅から旅への面白い話をした、娘は默つて聞いて居た、婆は自分はもう前の世の人間で、もあつたかの樣に變つた世の中の話を聞きながら、時々分らぬ獨言をするのだつた、人の浮世も知らずに、獨り山奥に育つた娘には唯珍らしい想がした、譯もなく人の世界が懷しく思はれた袖のないゑて袍を着て驚異の瞳を輝かして聞澄して居た娘の頭上には、今綺羅びやかな都會の有樣や、華やかな都人の風

景が走馬燈の樣に想ひ浮ぶのだつた、奥山の谷蔭に口を噤んだ固い白百合の蕾も、何時か時が來れば自づと開かずには居なかつた。物凄い夜嵐がまた林をかすめて吹いて來る、娘は思付いた樣に消えかけた爐の火を爐べた、熱つた二人の顔がパッと浮き出された、老婆は何時か寢入つて居た、爺さんは遂歸らなかつた。

翌日旅人は早く立つて行つた

「誠に御厄介に有難ふムいました、何づれ此の雪が消えたなら、復屹度こちらへ廻りますから——お禮はその節——ではお達者で」

「お靜かに——屹度お待して居ます」

娘は往來の小路迄見送つて行つた

寒い北國の山にも何時か温かい春の氣が流れ込む頃となつた、谷間の雪も消えて山櫻も散りかけた、綺麗な小鳥も唄ひ出したけれども——微かに引寄せられた娘の眉の愁は何時かな解けさうにもなかつた、娘は何時か物思ふ身であつた、——この雪が溶けたら復參ります——彼女の耳の底には深く此の言葉が殘つて居た、明方の鶏の聲にも、夕風の笹の音にも、娘は西の空を眺めては獨り物思ひに沈んだ、緑深い若葉に杜鵑の聲を聞く夏も巡つて來た、時折は身輕な裝束に峠を越す旅人も通る樣になつた、然し吾思ふ人影は愚か、梨の礫の便りさへなかつた。

うら寒い夕風に氣の早い山櫻の葉が散りかける秋の日の夕暮れだつた、先刻の茶店のある峠に旅女の死人があると云ので、往來の人が五六人がヤ〳〵騒いで居た、女の懐には乳呑兒が冷たく抱かれて居た、その後誰かがこの話を聞いて、今の石碑を建てたのだと云ふ。

「男なんて的にならんもんですえナ」婆さんは茶を汲みながら吐息するのだつた

「それはその男だつて何か譯があつて來たれなかつたのだらう」と私は言譯してやつた、往來の人々には僅か半日の記憶にも殘らずに過ぎて行くこの古塚にも、こんなロマンスがあるのだ(了)

手帳から

ライ生

○寢もやらず人も訪ひ來ず鈴虫の聲のみ高し庭の草むら

○亡き父のめでし庭面に秋の來て草葉の蔭に蟋蟀のなく

○實習の休みに息ふ桐の木に風ふき初めて秋は來にけり

○凉風の木曾の川邊に月澄みて淋しく聞ゆ蟋蟀の鳴く

○心地よくスマッシングを打ちこみて頬笑ひ顔に秋風のふく

○窓押せば雨は斜に過ぎたりし滊車の音風に絶へ〳〵に聞く

○校庭のポプラの風に鳴らぬ日のボールの音のコートより響く

まれごと

みちのぶ

○○ささみし消さんとすればなほさみし小雨にくるゝ頃はさみしも

○雨好むとのり給ひける君あらばさみしかりとは我の言ふまじ

○秋さめはこゝろさみしもひし〳〵とふるさと戀ふる旅の我身は

○月三更吾が足音に追はれつゝ心さみしく山路を辿る

○夕されば迎火やせむこぞの年みきかりにける妹のため

○きづつきし心抱きて來てあればなぜて久しうくらし得べきや

○飯はめど心進まずわずかなれば病ならむと君のたまふ

○銀ドロの梢かすけく搖る見れば秋風立つとわづかにしらる、

○長雨の止みて雪見ゆる駒ケねの峯にかゝれる夕映よろしも

○遠山のはだへまとへる雪見れば書きてやらん衣おくれと

○落葉松の梢にも秋は見へてけり木曾の谷間の夏ぞ短かき

杣

ケイ生

うら〳〵した太陽が
今向ひの谷に沈む

杣男は伐り倒した樹に腰を下して
暮れて行く空を眺めぬ
微かな光が
灰色に痩せた彼の頬を
緩く照す
邊りは晝の疲れから夜の復活に甦らんとする
谷の水音——
草のさゝやき——
虫の蠢き——
お、限りなきニンフの神の惠よ
男の頬に涙流れぬ
秋の日は暮れて行く

夕暮の窓

錦楚生

霞の影に燃え出でし
夕燒の空
桃色の流れ紅の匂ひ
音もなく溶けて行く。
エメラルドの樣な
青白い空
チラチラとまたゝく星
月は水晶の玉のやう。
鉛色の月の光り
若葉をすかして
柔かな波のごと
書齋に滿ち〳〵て入る。

やるせない我が心
其日の慾望も消えて
薄暗い沼の中に

沈みに沈む

◎ちるまで　花の姿も愛すべけれ
散りてこそ　花の色香も慕ふなれ
あせてこそ　移らなまじよ君が愛
永へに　變らなまじよ君が身よ
長へに　移り行く變り易き心もて
されどまた　變らぬ色と心とを
永へに　散りてゆく
此身に止め
春の暮までながめなば
あゝ、又吾は如何に辛き身ぞ。

忘れ事

去年の水無月の頃であつた樣に思ひますが本校寄宿舍に於て寮歌を募集した樣に思ひますが其後廿周年記念祝賀も本年に延期せられ遂に荏苒今日に至りましたが報音寥寥とでも云ひましやうか更に應募せらるゝ御方もなく何と報告してよいか更に其意を得ませんでした中に奇特なる二氏ありて寄せられました尤も二氏とも「良いものでもない樣です然し心はこめて作りました御募集の寮歌とならずとも參考までに御送り致します」との意味が付言せられて居りますから後ればせながら發表致します

1 み嶽駒ヶ根、
ふりわけ聳ゆ、
杭ヶ原べに、
我等が學舍、
2 自然のたくみ、
勵む學びに、
を、しき姿、
蘇水に映す、
3 神代の緑、
勢こむる、
務めはげます、
理想の歩み、

1 四圍の緑
櫻の花を
春の遊びの
2 若葉駒ヶ根
雨を思へば
夏の學びの
3 時雨染めなす
夕雲どさす
秋の眺めの
4 み嶽の肌に
積る白雪
冬の務めの

島人。
西東、
其麓、
そゝりたつ、
南北。
身にしめて、
實習に、
競ふべく、
鏡あり。
天をさす、
心もて、
友垣に、
我あげん。
蘇門漢。
濃やかに
浮き出さす
樂しさよ。
窓にして
螢とぶ
ゆかしさよ。
紅葉(しゅう)ばに
山の窓
嬉しさよ。
風荒れて
踏みしだく
健氣さよ。

寄宿舍から

卒業生を送り出した頃は未だ裏山の落葉松の影には雪の名殘を止めて居ました進級

したのだ上級になつたのだと言ふ感じもほんとうに湧かずそれでも變つた事のあれかしと願ふ心の中には新入生を迎へる喜びもまぢつて毎夜床の中での話はそれ等の人達の噂でありましたスッカリ舍内掃除も行はれ障子も新しく張り替へられました戸棚にも帽子掛にも新しい人達の名札が張られました。町には新入生らしい人達がボツボツ見える樣になつたなどと話す通學生もありました十五日入學式の夜には新舍生歡迎の會を催しました色々な餘興が續出して盛んなものでした。

其後は毎日／＼同じ事が繰り返へされました、起床、檢査、自習、登校と千遍一律な日課が來る日も來る日も皆を苦しめました時また一年生の不馴れなための失策がわずかにこの單調味を破つてくれる位のものでした北寮と南寮と間違へて飛び上つたりする滑稽も少なくなつてインザ會の意味にも通ずる頃にはもう厭な梅雨季でした殊にこの地の梅雨は馴れたものにも堪へられぬ位ですから初めての諸君には隨分厭だつたに違いありません用事に逼られてしようことなしの外出にもあの小便小路（御料官舍の上の道）の泥濘を思ひ出すと慄然として二の足を踏む位なのですから。

六月中旬から各學年共臨時試驗が始りました全學科を行ふために日割も發表されました名高い毛付市もジメジメした梅雨季の終りに開かれました外出も幾日か許されて町も隨分賑かな一週間だつた樣です

馬市に引き續いて降雨に地盤が弛んだのでせう七月十日の夕暮でした福島電氣會社の發電所の眞上が崩壞して水路をこはし發電所の内部にまで土砂を流しこんでしまいました舍生の大部分が出かけましたが雨は、ドンドン降る水は增える手のつけやうもありません損害も中々大きく復舊も容易じやありませんズーッと休暇まで杭の原一圓石油ランプの昔を現出しました舍生はわずかに蠟燭の光で過しました無論臨時試驗は各級とも二三科目宛殘して中止になりましたもつとも町は水無神社の例祭（宗助幸助のマクリ祭）の前日頃から點燈された樣でした、十八日から夏季實習が始まりました學科の豫習復習もなく殊に夜の無聊には苦しみました時には暗を破つてstorm、此の塲合不適當かも知れませんが）のふき廻す事もございました「電燈なき寄宿は暗黑なり」こんな惡戲書の食堂の黑板にのせられたのも其の頃の事でした。

今年は降雨の所爲か脚氣患者殊に多く其の爲に歸省するものが三十餘名に上りました（この病氣豫防に就て御意見がございましたならこのために惱む後輩のために御知らせ下さらば幸甚に存ます）けれ共殘餘は皆大元氣で御嶽登山、上高地視察、伐木見學の旅行を幕に夫々の故郷へと歸りました休暇後の事は後に讓りませうたゞこの頃は縣下實業學校聯合マーチ參加のため各自得意の運動にはげんで居る事を添へて擱筆することにいたします。（一舍生）

謹告

豫て諸兄の御貸同を得候島内先生の謝恩金は林友紙上に發表致せし通り總計金壹百四拾七圓六拾錢と相成申候今回諸兄の芳名を記せる冊子と共に全部送金致し候に付此段及御報告候也

大正十年九月　藏尾眞

各位

動靜

○元校長江畑猷之允氏には岐阜縣より山梨縣林務課長へ御轉任の由

○古澤久治君　小樽花園町東四丁目秋田木材株式會社小樽出張所氣付サルマガ柵東林業合資會社へ

○岩井洋治君　農商務省山林技手並に長野縣產業技手拜命長野縣内務部在勤被命の由

○石坂季治君　帝林局岐阜縣小坂出張所へ轉任の由

大正十年九月廿三日印刷
大正十年九月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編輯兼發行人　安井正夫
長野縣西筑摩郡福嶋町三八九番地
發行所　蘆澤書店

長野縣松本市小柳町八十五番地
印刷人　淺川吉藏
長野縣松本市小柳町八十五番地
印刷所　淺川活版所電話三八三

【定價金參錢】